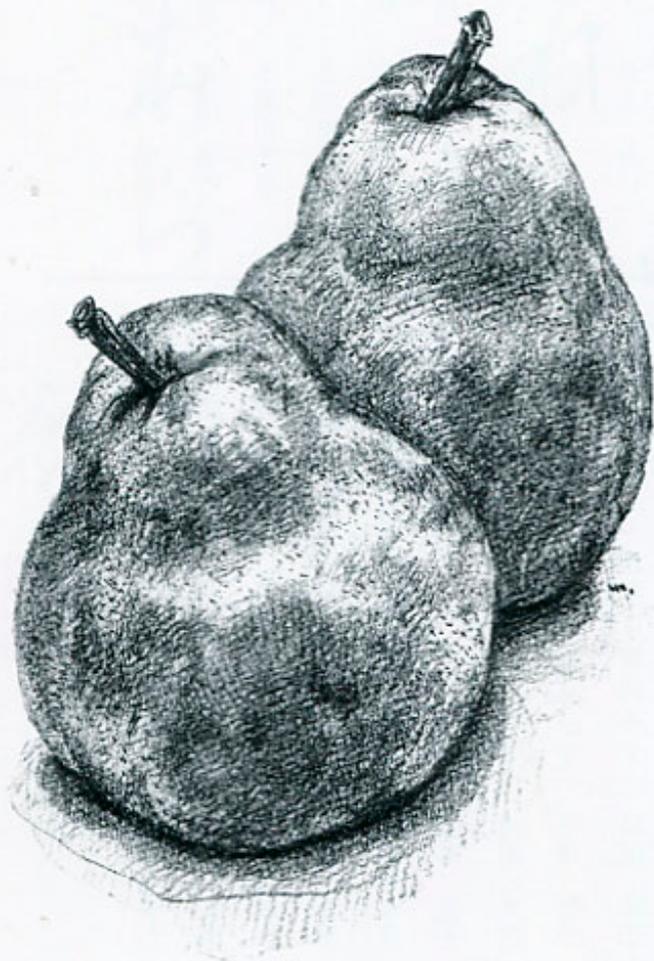


昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成22年9月5日発行(毎月5日1回発行)  
第50巻9月号(通巻614号)

# 風土



9

金魚玉  
神蔵器

炎天を消して托鉢僧の行く  
盆の来る石ころ一つ投げ捨てて  
魂棚の奥より涼し風の吹く  
一本の大樹に夕立見送れり  
水音に仏つれ出す月見草

面剃つて顔の細りぬ梅雨の明く  
これやこのはや竹の子の脱衣紋  
激雷や「剃刀日記」開くまま  
草田男忌働く汗の塩辛き  
鬼灯の地に近きより灯の点る  
金魚玉われらに余生などあらず  
知覧  
一つ見て三千三百余の蛍



# 竹間集

同人作品



半夏生

田中佐知子

草の風木の風一番蛭待つ  
谿指してゆく蛭火の行方かな  
走り梅雨神苑の樹々匂ひたつ  
半夏生遣水の底砂流れ  
遣水にふんばつてゐるあめんぼう  
またたびの花は葉裏に山雨急  
岩戸社へ攀づる鎖やかたつむり

もつれ蝶

工藤ミネ子

旨さうな水嵩保つ植田かな  
早苗植糸太陽を植糸深眠り  
アカシアの匂ひが風に眼を細む  
親木守る実生の樵の青葉かな  
馬鈴薯じゃがいもの花を過ぎゆく野辺送り  
子鴉の真赤な口に親の嘴  
杉の秀を越えてしまへりもつれ蝶

蛭まつ

柴田久子

夕方の雨の匂ひのてんとむし  
蛭まつうしろの闇を深くして  
水紋の風に毀るる雲の峰  
万歩計万歩を越えて樵若葉  
海神を祀りし禰宜の跣かな  
子の跣太平洋へまつしぐら  
前うしろある庭石や青蛙

山法師

中村 洋子

分蜂の一群の過ぐ山法師  
倒木の瘤にはじまる蟻の列  
子子のしなやかなりし浮き沈み  
まくなぎに追ひつめられてゐたりけり  
ほうたるに闇の銀河となりにけり  
田水張る塩田平の星の数  
水のこゑ土のこゑある植田かな

夏 椿

橋添やよひ

王朝の和歌守展や花菖蒲  
おしめりや高野の口の落し文  
水早き狐川なり代を掻く  
夏燕龍太母校に遺筆の句  
鶏鳴や身をそらしては袋掛  
郭公や北岳へ向く蛇笏句碑  
振り返る門柱高し夏椿

森の闇

南 うみを

森の闇押しくる網戸入れにけり  
あめんぼの子を弾きぬる水面かな  
枝しづく滂沱の杏摘みにけり  
墓山の風をたまはる裸かな  
鮎の竿擬宝珠の橋をくぐりけり  
皮なめすごとくに鱧を捌くかな  
賀茂茄子のまうこれいじやう膨らまぬ

木下 闇

島谷 征良

山望むさまにねぢれて鯉幟  
一片の雲を浮かべて夏の色  
麦秋や隠しの中の手付金  
老鶯の一溪占むるごときかな  
もと光る竹ともならん今年竹  
尼様にお弟子二人や木下闇  
多佳子忌や落日燃えず海に入る

夏 游

— 中村 洋子 —

空 豆 の 飛 ん で 空 海 三 鈷 かな  
を が た ま や 極 楽 寺 坂 川 流 れ  
薔 薇 咲 け り ス テ ン ド グ ラ ス の 文 学 館  
新 緑 や 歩 幅 大 き く 森 に 入 る  
火 縄 銃 か つ ぐ 北 條 祭 かな  
寒 山 と 拾 得 の 舞 ひ 四 葩 咲 く  
大 仏 の 堂 内 に 聴 く 梅 雨 の 雷  
神 楽 坂 に 打 ち 水 の 端 流 れ 出 す  
水 打 つ て あ り 先 斗 町 の 急 ぎ 足  
旅 鞆 そ の 上 に 乗 る 夏 帽 子

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

都忘れ花明りして尼の墓所

中根 美保

枇杷剥くや手首まで蜜滴らし  
竹皮を脱ぎてまとへる光かな  
睡蓮の黄金の蕊を掲げけり  
老鶯に風の湿りて来りけり

夏蝶や老人に来る誕生日

根岸 善行

麦秋や女消えたる停留所  
曲り角過ぎし余生の西日かな  
土の匂ひ草のにほひや時鳥  
紫陽花の色に流れてをりにけり

車椅子用のチャイムや麦の秋

下山田美江

沙羅咲くや国際看護大学校  
雨蛙柱 四本の車寄せ

一脚の弛びし椅子や明易き  
結び直す靴紐 四万六千日

生田恵美子

はや水輪作るものゐて代田澄む  
笥流し青背の魚炊き上げて  
高原に雲入れ替はる夏蔵  
立葵低きが蝶となりて翔つ  
豆植うや鴉は私語を交し合ひ

付き添ひて

雨宮 桂子

短夜の分婉室の丸時計  
産声を上ぐ泰山木の第一花  
赤ん坊五月の風を握りしむ  
六月や赤子のかかとまんまるし  
ぼんのくぼまだ不確かに天瓜粉

◇特別作品◇(抄)

## 天城里の四季

吉永すみれ

暁や音なく来たる初雀  
日も月も命も一つ亀鳴けり  
城跡の風の起せし花の乱  
心太さらりと言葉躲しけり  
山門を出れば現し世戻り梅雨  
大いなる翼広げて夕立来る  
廃寺訪ひ色なき風にまぎれけり  
歩み来し一筋の道冬桜  
大寒や白波上げて日蓮岬  
ガスの灯のぽぽと今宵は時雨かな

# 風土独語／神蔵器



涼風や空より外す大クレーン

根岸 善行

戦後も三十年代に入ると土地ブームというか、特に都市部ではたちまち高騰して行った。「日本の国土は殖えることはないから持っていた方が勝だよ」と言われていたが、日本の土地は少しも殖えないが、土地の値段は立体的な使用によって圧倒的に増している。

例えば新宿西口のかつての淀橋浄水場が、都下東村山市に移転した跡地とその周辺、いわゆる新宿副都心の超高層ビル街である。京王プラザホテル本館47階一七〇メートル、南館35階一三二メートル。住友ビル52階二〇メートル。三井ビル55階二二〇メートル。安田火災海上ビル43階一九三メートル。野村ビル50階二〇三メートル。新宿センタービル54階二二六メートル。新宿第一生命ビル26階、ワシントンホテル25階などはぐんと沈んで低く見えるほどだ。

超高層ビルが大略完成に近づき、重い鉄鋼管や大形の資材を吊り上げたり運ぶ必要が無くなった屋上に据え付けられた建築の立役者も無用の長物、どう始末するのであろうか。

大クレーンの超長大なアームも、ただ一本のように見えるが、あたかも継ぎ釣竿のように、太い鉄鋼管から次第に細いものへと

何本か継ぎ足して必要なアームの長さを得ている。従って先より一つずつ解体して下ろすより仕方がなかるう。ただ釣竿と異なつて超重量があり、ことに目もくらむような高い空中であることなど途方もない困難な作業である。

ところで、この句の「空より外す」は作者のマジック。四十階、五十階の屋上の超巨大なクレーンの解体など、一般人の地上から眺めては解らない。昨日まで超高層ビルの屋上から豪然と聳えていた大クレーンが、今日は忽然と消え失せ、雲一つない晴れわたつた青空にただ涼風があるばかりだ。つまりこの句は龍太先生のいう俳句の秘密がたっぷりと含まれた名句である。

夏座敷広げる 鉾の設計図

西村 雪園

作者雪園さんの家系は、江戸時代から二百二十余年も続く名家で、墨手描きの月鉾の設計図があり、これを茶掛けに軸装して、毎年六月頃には床の間に掛けていた。それがどういいういきさつからか先年、月鉾保存会に寄贈してしまつたそうである。従つて今日設計図は手元には無いわけであるが、祇園祭が近づき鉾立ての話などちらほら聞くと先ず自分の家の座敷に月鉾の設計図を開いて見ていたことも思い出され懐かしんでいられるとのことであつた。

祇園祭は綺羅錦繡、豪華絢爛たる祭であるが、実は神にすがる悲涙の地団駄祭といわれる。夏季に暴威を振う疫神に、最愛のわが子を奉ることによつて疫神の魔心を防ごうとしたぎりぎりの工夫であつたが、選ばれた稚児の親としては悲傷悲嘆はあまりにも大きかつた。稚児に神位神格、十萬石の格式を授けられたとして

も親の身には何の慰めにもならない。

雪園さんの家に月鉾の設計図があったということは、繚乱、華妍、歡喜の甘塙の中に、先祖の他人には決して見せない涙があったのではなからうか。

(以下略)

# 風土集



# 神蔵器選

涼風や空より外す大クレーン

上尾

根上 善行

生きてゐるかぎりは半ば雲の峰

雲の峰忽ち午後となりにけり

競ひ合ひけり郭公と青空と

太陽を引きずりおろす枝下し

夏座敷広げる銚の設計図

京都

西村 雪園

見下せば洛中洛外梅雨の色

ふるさとの仏に逢ひて半夏生

夏来る絵の中にある船出より

羅に選ぶ枇杷色博多帯

寝て畳座りて畳田植果つ

岡山

高村 令子

体内の水濃くなりぬ夏木立

解り合ふことは聞くこと蟻の列

花ポピー明るく愚痴をこぼしけり

あと一步ふみ込めぬ性羽抜鶏

白南風やテレビのレシピ走り書き

横浜

安永 圭子

亡き伯母を慕ふ周防は麦の秋

通夜の間へ向かふ螢火一つあり

忘れぬ恋路や夏の武甲山

聞き返す日時や烏瓜の花

七月の竹琅玕に嵯峨野みち

相模原

天野みゆき

どの寺も夏百日の京都かな

香を負ひて来し大原の夏花売り

青葉木菟人呼ぶごとき坊泊り

おん指の反りの涼しき伎芸天

青嵐フェリーで渡る優勝旗

川崎

山本 浪子

キャンパスのチャペルに隠る桜桃忌

若き日の玉三郎や白菖蒲

一徹はおのづから現れ白餅

一人居や月下美人を友として